

学生諸君への感謝

藤原 一弘

私がある音大で担当する講座のひとつに「音楽と宗教」があります。昨年度は、後期に 20 世紀を代表する芸術表現のジャンルである映画を取り上げ、前期に学んだキリスト教の世界観や様々な概念が映画の中でどう表現されたのか、そこで音楽はどのような役割を担ったのかを講じ、人間とは何かというテーマで『2001 年宇宙の旅』（監督 S. キューブリック、1968 年英）、『惑星ソラリス』（監督 A. タルコフスキー、72 年ソ連）を、罪と許しの問題に関して『フラットライナーズ』（監督 J. シューマカー、90 年米）と『道』（監督 F. フェリーニ、54 年伊）を取り上げました。最後に、後期に扱った映画と音楽から一つの作品を選び、宗教に対する自分自身の考えを交えて論じるというレポートを課しました。学生たちが宗教をどうとらえているのか、人間の罪や死など、彼らの日常とは関わりのなさそうな、いわゆる暗いテーマと彼らがどう立ち向かうのかを知りたかったためです。特に、一年間の最後に扱った『道』に関し

ては、人間の心の最も深いところへ直接響いてくるようなこの映画に、20歳前後の今日の若者たちが一体どう反応するのか、大きな期待がありました。

レポートを読み始めてみると、私の期待をはるかに上回るような真剣な取り組み方で彼らがレポートに臨んだことがすぐにわかりました。中でも驚かされたのは次の二点です。まず、大学生活の4年間ほどの短時日に彼らが人生の様々な局面を体験し、物事を見る目を著しく深化させているという点です。日頃は明るく振る舞っている彼らが、実は静かに自分自身と世界とに対峙しつつ、日々新たな自分へと刻々と変化を続けていることが、1年生と4年生との文章の巧拙、主題の掘り下げの深さの違いとして明らかに表れていました。第二は、映画や音楽の作品の中で表現された人間の弱さ、脆さ、小ささ、醜さ、酷さなど、生きていく過程で誰しも避けて通れない、しかも直視したくない問題の数々を、彼らが他人事としてではなく自分自身の問題としてしっかりと捉えていた点です。

ある学生は、『道』の中でザンパノが自らの過ちに気付くという小さな改心にはジェルノミーナが必要であったように、自分の悔い改めにもどれ程の犠牲が払われなければならなかったのかと書きました。日々、規模は小さいながらも、確実に他者を少しずつ傷つけ、また傷つけられながら、常に不安を抱えつつ生きる彼らは、映画に登場する悲しむ人々を思いやり、人の痛みを自分の痛みへと置き換えて理解する若い柔軟な能力をまだ豊かに備えています。そして、ジェルソミーナの心に響いた音楽がいつか頑ななザンパノの心にも響きますようにと、罪ある者を力によらずとも天を見上げさせうる、音楽のもつ心への深い作用を音大生としてしっかりと把握しているのです。

こちらから投げかけた問題を、彼らが見事に受け止めてくれている点も確かに嬉しくはありました。しかしながら、貴重な、今後も絶対に失ってほしくない、誠実で質朴な淳良さを彼らをもっており、しかもレポートという半ば強制された状況ではあれ、それを的確に表現してくれたということが私にはとても貴重思えたのです。

同時に、彼らに対し申し訳ないと思ったのは、日頃から偏見・先入観を持たないようにと思い続けているのにも関わらず、彼らを個々の独立した人格としてではなく、つい「今の学生は」などという曖昧でいい加減な決まり文句で、実体のない集合としてとらえがちであったことです。教壇から彼らに話すことは、私には一対多と思えても、彼ら学生の側からすればあくまでも一対一の関係になるわけです。

いつまでも感動する心を忘れないでほしいと、最後の授業で学生諸君に贈った19世紀イギリスの詩人W. ワーズワスの『虹』という詩を引用して、この短い一文を閉じます。

わが心はおどる

虹の空にかかるを見るとき。

わがいのちの初めにさなりき。

われ、いま、大人にしてさなり。

われ老いたる時もさあれ。

さもなくば死ぬがまし。

子供は大人の父なり。

願わくばわがいのちの一日一日は、

自然の愛により結ばれんことを。

(田部重治 訳)

(ふじわら かずひろ・キリスト教研究所研究員)

